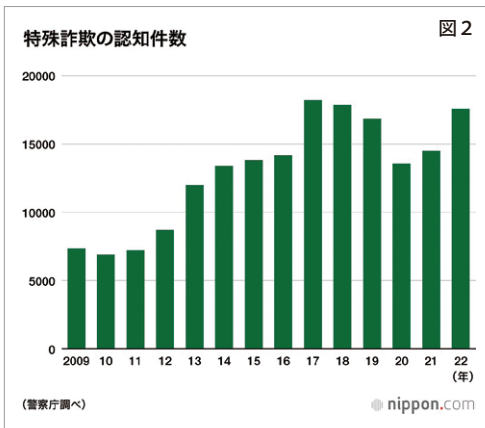
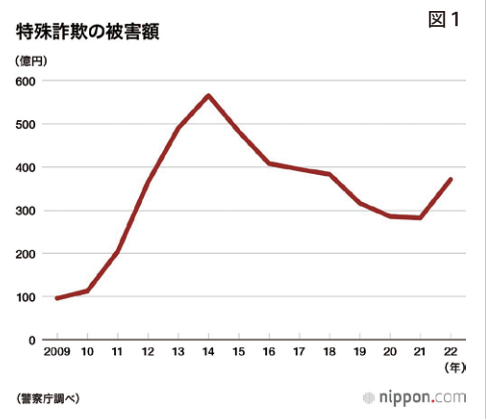


なりすました病氣

振り込め詐欺と日本人

振り込め詐欺などの特殊詐欺の被害額は、2022年には8年ぶりに増加して370億円超、その認知件数は1万7千件ほどでした（警察庁／図1・2）。警察やメディア・銀行が「振り込まないで！」といくら注意喚起しても減らないのはなぜでしょうか？日本人はそんなにお人好しで、疑うことを知らない間抜けな国民なのでしょうか？振り込め詐欺がアジア圏に多く発生している要因の1つとして、「家族（親子）のつながりの強さ」が指摘されています。つまり個人主義が強い欧米では「成人した子供や孫が不祥事を起こしてもそれは本人の自己責任」と考えるのに対し、家族関係が密なアジアでは肉親の情につけ込まれて高齢者がだまされてしまうというのです。

例えばフランスでは成人後の子供に親は金銭的な援助はしない一方で、日本よりも頻りに連絡を取り合っているとのデータもあり、「欧米人は日本人より家族関係が希薄」というわけではないようです。巧妙化する手口で息子や孫になりすました犯人から自分の身を守る



ためには、日頃から「ホントにそうかな？」と考えて日々の情報を無条件に受け入れない（情報を批判的にとらえて評価／判断する）必要があります。

似て非なる別の病氣

「なりすまし」といえば、症状からは想像（診断）しにくい病氣は少なくありません。例えばノドの違和感や異物感、左肩やみぞおちの痛みが実は「心筋梗塞」ということがあります。糖尿病があったり高齢女性では典型的な胸痛がでにくい場合があるのです。また、意識障害や片麻痺で脳卒中かと思ったら「低血糖」だったことも珍しくありません。この他にも長引く咳が「胃食道逆流症」だった例、息切れの原因が「貧血」と判明した症例、足のむくみが「甲状腺の病氣」だったなど、だまされやすい病氣は多種多様であり、特殊詐欺の手口が多様化・複雑化しているのとよく似ています。

医療の現場では症状や所見が似ている疾患を「ミミッカー」と呼び、これは mimic（まねる）という動詞から派生した用語です。紛らわしい／よくある症状から正しい診断にたどり着くには病氣の典型像を知っているだけではなく、非典型例やミミッカー症



例も含めて症状の多様な理由を振り返ることが診断力向上につながるのです。

情報リテラシーの大切さ

振り込め詐欺でも「なりすました病氣」の場合でも、入手した情報は批判的思考により評価／判断する（正しく見極める）ことが大切です。世の中は様々な情報であふれており、情報の中には誤った理解をさせてしまう「誤情報」や意図的に拡散させようとする「偽情報」が紛れ込んでいるため、正しい情報の入手や利用がうまくできない人（情報弱者）や、ネット情報の信ぴょう性を吟味せず無批判に受け入れてしまう人（情報難民）が少なくありません。

情報を適切に判断して活用できる能力のことを「情報リテラシー」といい、具体的には情報を「取得する力」「理解する力」「解釈／評価する力」「活用／発信する力」などに大別されます。疫病・災害・戦争など「混乱と迷途の時代」を生きている私たちのため、情報リテラシーは情報化社会を生き抜くための必須アイテムと言えるでしょう。



沼尾 利郎
ぬまおとしお

日光市生まれ。宇都宮高校、獨協医科大学卒業後、米留学を経て塩谷総合病院副院長、国立病院機構宇都宮病院院長を歴任。現在は同病院名誉院長として宇都宮セントラルクリニック等で診療。専門は呼吸器、アレルギー、スポーツ医学など。

皆様の感想や先生に書いてほしい話等ございましたら事務局までご連絡ください。

